タッチストーン・ピクチャーズ&スチーブン・スピルバーグ提供

ロジャー・ラビット

ロバート・ゼメキス作品

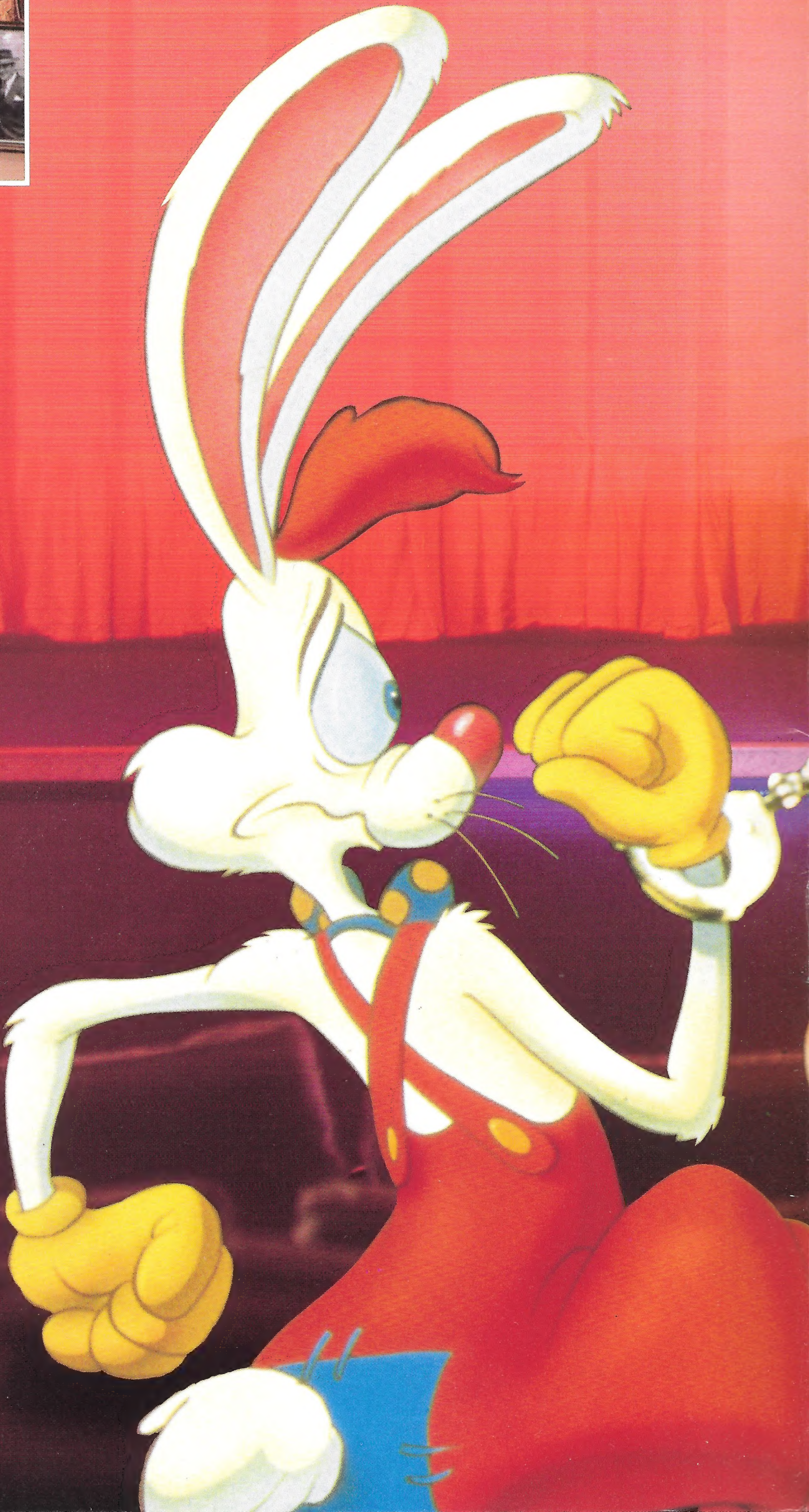


W H O · F R A M E D ·

これほど楽しい映画は、20世紀にはもう出てこない！







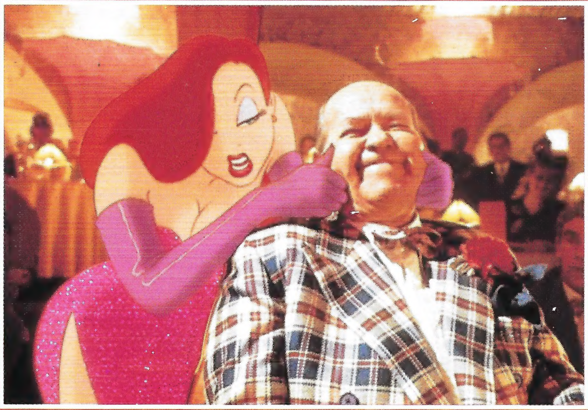
R O G E R・R A B B I T

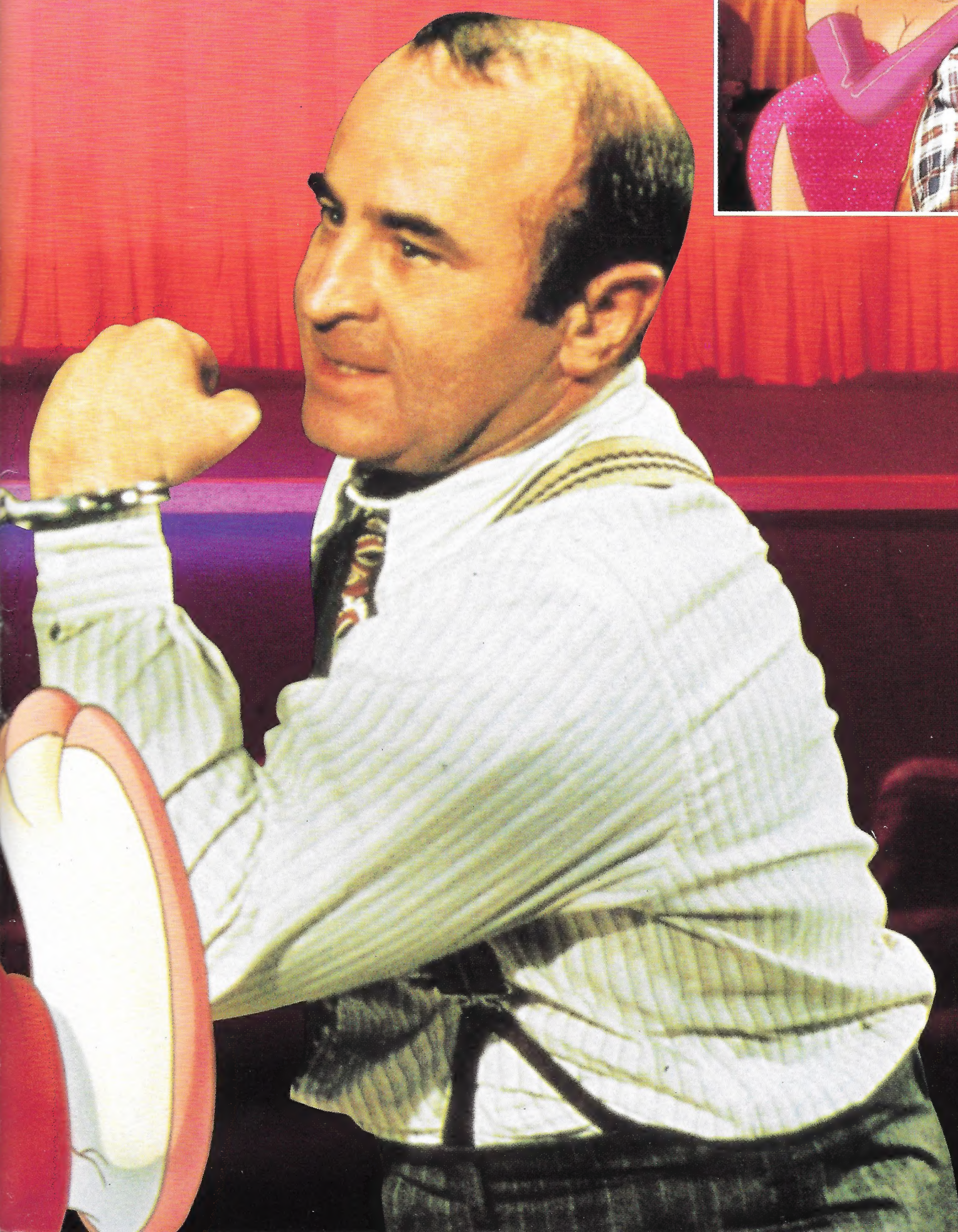
タッチストーン・ピクチャーズ&スチーブン・スピルバーグ提供

ロジャー・ラビット

ロバート・ゼメキス作品

AMBLIN ENTERTAINMENT　TOUCHSTONE PICTURES





INTRODUCTION

「ロジャー・ラビット」は、うたがいもなく、映画が初めて到達した映像で語られる、全く新しいジャンルの映画といえます。それは、実写とアニメが違和感なく同一画面で生き生きと活躍する世界です。この成功により映画の面白さの世界が、一挙に何倍にも広がったとも言えます。

たしかに今までも実写とアニメの合成という実験はなされてきました。しかしそれらは、立体的な人物や動物の実写の世界と、紙やセルに書いた平面的なアニメの世界とが、どうしても同一画面でなじめなかったのです。

「ロジャー・ラビット」はこの部分の解決に莫大な費用と時間をかけました。立体眼鏡をかけずに出すアニメの立体感。それは気の遠くなるような緻密な光と影の世界です。この作品は、それをすべてベストアニメーターたちによる手描きで行ないました。勿論、1秒間24コマの完全フルアニメです。

完成したアニメ達は皆、立体感というよりも量感を持っています。皮膚の下には肉付が感じられます。血管や筋肉や骨のある充実した空間があります。だから、単にセルや紙に描かれたものでなく生きものという感じ、ライブ・アニメーションとも呼べるものになったのです。合成技術も画期的です。アニメは本物のピストルを撃ち、アニメにつままれた人間の頬は人間の手でつままれたと同じように変形します。

タッチストーン・ピクチャーズとスチーブン・スピルバーグが手を組んだからこそ出来たこの作品は、あらゆる意味において、アメリカで一世代に一本しか出ない作品、即ち「白雪姫」「ファンタジア」「風と共に去りぬ」「スター・ウォーズ」「E.T.」などに連なる作品になったのです。







これは絶対にみのがせない。
かつて見たことのない映画に乾杯。
――ニューズ・ウイーク/テイビッド・アンセン





最初から最後まで全てのコマが
素晴らしいエンターテイメントだ。
面白いだけでなく、心浮き立たせる!
シカゴ・サン・タイムズ/ロジャー・エバート





ロジャー、君への友

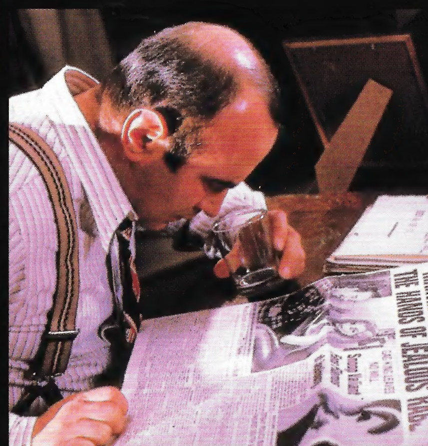


お祝いしましょう。
歴史に残る痛快な娯楽映画に——。

——ピープル・マガジン/ピーター・トラバース

こんなものは見たことがない。
面白い以上だ。ワクワクする。

——ニューヨーク・ポスト/ロバート・エバート



全ての場面が、
驚きと感動に満ちている。

——ロサンゼルス・タイムズ/シェイラ・ベンソン

笑い…スリル…驚きの連続。
今年一番の話題作となろう。

——CBSテレビ(ニューヨーク)/デニス・カニンガム

E.T.以来最高の
そして最も純粋な
ファンタジー映画。

——ニューヨーク・タイムズ/ビンセント・キャンビー

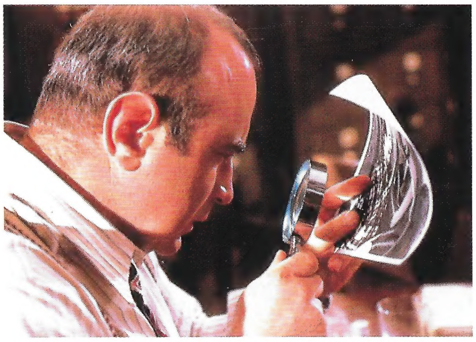
情がアメリカの気温を1℃上げた。





1947年ハリウッド。街にはトロリーバスが走り、撮影所の近くにはアニメーションのキャラクター＝トゥーンの住むトゥーン・タウンがある。ロジャー・ラビットはトゥーンのスターだったが、近頃どうも精彩がない。短篇連続アニメでベビー・ハーマンと共演しても、今日も23回もNGを出してしまった。原因はわかっている。妻のジェシカが浮気をしているらしいのだ。撮影所長のマルーンは、スカンピンの酔いどれ探偵エディに、ジェシカの浮気の証拠をつかむように依頼した。決定的な写真を見せてロジャーにジェシカをあきらめさせるつもりなのだ。

エディはかつてトゥーンたちのために輝かしい功績を挙げた探偵だった。だが、弟がトゥーンに殺されてからは、すっかり呑んだくれている。酒場につとめる恋人のドロレスからカメラを借りたエディは、何とかジェシカと、トゥーンのおもちゃ会社の社長でトゥー



STORY

ロジャー・ラビットをハメたのは誰だ？
トゥーン・タウンに危機迫る。

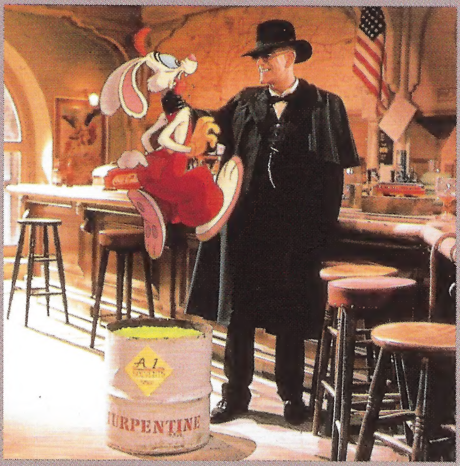




ンタウンの持主、マービン・アクメの浮気の現場写真を撮った。その写真を見たロジャーは興奮して撮影所をとび出していった。

翌日、エディはサンティノ警部に叩き起こされた。アクメが殺されてロジャーが容疑者になっているらしい。担当判事のドゥームは犯人をロジャーと決めつけ、見つけ次第、溶解液で死刑にするよう手下のイタチに命じた。

事務所に帰ったエディをロジャーの相棒ベビー・ハーマンが待っていた。ハーマンはアクメはトゥーン・タウンをトゥーン達に残す



と言う遺言状を残していたという。エディが写真を調べるとそこには確かに遺言状が写っていた。だが、殺害現場にはなかった筈だ。考え込むエディの前にロジャーが現われた。エディの部屋に隠れていたのだ。そこへイタチたちがやって来た。何とかイタチたちをゴマ化したエディは、ロジャーをドロレスの酒場にかくまった。どうもこの事件には裏があるようだ。エディを訪ねてきたジェシカの話だと、ジェシカはマルーンに脅されてわざと浮気の写真を撮らせたと言う。しかも、ドロレスは今日の０時までにアクメの遺言状が見つからなければ、トゥーン・タウンはスピード産業のものになるという話を聞いてきた。この殺人にはトゥーン・タウンのっとりがからんでいるらしい。

ドゥーム判事はイタチを引きつれて酒場に乗り込んで来た。エディとロジャーは、トゥーンの車のベニーの助けで何とか逃げ出した。ドロレスと落ち合った映画館で、エディはマルーンが撮影所をスピード産業に売ったというニュースを見た。トゥーンタウンをめぐる謀略に気づいたエディは、深夜マルーンを訪ね、撮影所売却にはトゥーン・タウンも一緒だという条件だと聞き出したが、その瞬間マルーンは何者かに射殺されてしまった。エディの目に映ったのは、あわてて逃げ出していくジェシカの姿だった。

エディはジェシカの車を追った。行く先はトゥーン・タウン！エディはヨセミテ・サムから贈られたトゥーンの銃を手にいまわしい思い出のあるトゥーン・タウンへ入って行った。

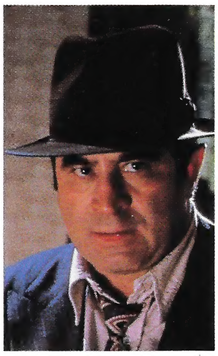
だが、ようやく追いつめたジェシカは意外な事実を明らかにした。犯人はドゥーム判事だと。姿を現わしたドゥームを追って、ジェシカとエディはベニーを飛ばした。だが、罠にはまった２人は逆にドゥームに捉えられてしまった。２人は、そしてロジャーはどうなるのか。トゥーン・タウンに危機迫る!!





PE

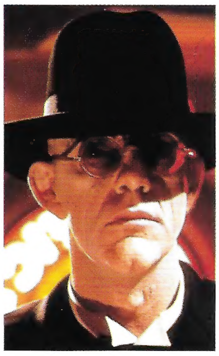
ボブ・ホスキンス(エディ・バリアント)
BOB HOSKINS



1942年10月26日、イギリスのソーフォーク州ベリー・セイント・エドマンズ生まれ。市場の運び屋、サーカスの火食い術師などさまざまな仕事をし、3年間会計士の訓練を受けた。25歳の時にセイント・パンクラスのユニティ劇場に飲みに行き、役をオファーされて“The Feather Pluckers”に出演した。69年にストーク・オン・トレインでの「ロミオとジュリエット」でプロの俳優としてデビュー。78年のBBCのテレビ・シリーズで“Pennies from Heaven”で主役の楽譜セールスマン、アーサー・パーカーに扮して一躍有名になった。映画は“The Long Good Friday”(80)で『イヴニング・スタンダード』紙の男優賞、「モナリザ」(86)でカンヌ映画祭の主演男優賞を受賞し、演技力を高く評価された。

作品 ㊹National Health ㊺Inserts、ローヤル・フラッシュ ㊾モンティ・パイソン/ライフ・オブ・ブライアン、Zulu Dawn ⑳ The Long Good Friday ㉒ピンク・フロイド/ザ・ウォール ㉓Lassiter、The Honorary Counsul ㉔コットンクラブ、未来世紀ブラジル ㉕The Dunera Boys ㉖Sweet Liberty、モナリザ ㉗The Lonely Passion of Judith Hearne

クリストファー・ロイド(ドゥーム判事)
CHRISTOPHER LLOYD



1938年10月22日、アメリカのコネティカット州スタンフォード生まれ。19歳でニューヨークに出てネイバーフッド・プレイハウスに学んだ。やがてブロードウェイの“Happy End”でメリル・ストリープと共演、オフ・ブロードウエイの“Kasper”で73年度ドラマ・デスク賞、オビー賞を受賞して頭角を現わし、75年には「カッコーの巣の上で」の好演が認められ、同作の映画化で銀幕デビューを果した。これを機にロサンジェルスに本拠を移し、“Goin' South”(78)、「郵便配達は二度ベルを鳴らす」(81)とジャック・ニコルソン作品を皮切りに数々の映画で性格俳優として個性溢れる演技を披露。「スター・トレック3/ミスター・スポックを探せ!」(84)でクリンゴン軍司令官に続き、「バック・トゥ・ザ・フューチャー」(85)の科学者役で、その名を高めた。ミニ・シリーズ、TVCMの出演も多く、エミー賞を獲得した長寿シリーズ“Taxi”の元ヒッピーのジム牧師役でも知られている。

作品 ㊺カッコーの巣の上で ㊼新・男と女、Three Warriors ㊽Goin' South ㊾新・明日に向って撃て!、The Lady in Red、The Onion Field ㉑The Legend of the Lone Ranger、郵便配達は二度ベルを鳴らす ㉓メル・ブルックスの大脱走、ミスター・マム ㉔Miracles、スター・トレック3/ミスター・スポックを探せ!、The Adventure of Buckaroo Banzai Across the Eighth Dimension、ブラッド・シンプル ㉕バック・トゥ・ザ・フューチャー、殺人ゲームへの招待 ㉖Bobo ㉘Track29、Eight Men Mut

ジョアンナ・キャシディ(ドロレス)
JOANNA CASSIDY



ニュージャージー州生まれ。ニューヨークで活躍中のモデルというにせのふれ込みで地元テレビ局に売り込んだのがきっかけで、女優となる。TV「スタスキー・アンド・ハッチ」の精神倒錯者、「ブレードランナー」のレプリカント、「アンダー・ファイアー」でラジオ特派員、“The Fourth Protocol”で技術者を好演。

作品 ㊳ブリット ㊵愛のさざなみ ㊸マシンガン・パニック、組織 ㊺Night Child ㊼The Last Show、スタントマン殺人事件 ㊽Our Winning season ⑳ナイト・ゲーム、㉒ブレードランナー、アンダー・ファイア ㉖Club Paradise ㉗The Fourth Protocol













ロジャー・ラビット
ROGER RABBIT

マルーン・カートゥーン・スタジオの秘蔵っ子スーパースターだったが、めきめきと頭角を現わしてきたベビー・ハーマンと「ザ・バニー・シッター」で共演するやいなや、落ち目になる。

大立者の社長R.K.マルーンは、次のように説明している。「頭の上に冷蔵庫を20回落としたって、壊れるような男じゃありません。でも心のきずだけはね。ぼろぼろになってしまうんです。人間と同じですよ」。

ジェシカ・ラビット
JESSICA RABBIT

「女であるっていうのは、むずかしいことね。しかもあたし位容姿に恵まれているとね」。ジェシカのせりふ。ジェシカは豊かな資質に恵まれた、赤毛のグラマー美人。地元のナイトクラブ「インク・アンド・ペイント」の歌手でブルースが得意。画家が豊かな想像力と筆を駆使するとこんなに素晴しいスタイルの女が生まれる。

ロジャーにとって、ジェシカは貞淑な妻であり、人生の光、大切な宝、そしてコーヒーに入れるクリームのような存在なのだが……。

ベビー・ハーマン
BABY HERMAN

別名アンクル・バイター(女たらし)。午後の休みに、辛口のマティー二を一杯やりながら、ハバナ産の葉巻を吸うのが何よりも好きな男。

ただひとつ欠点がある。50歳で性欲も強いが、お道具が3歳児並みのサイズだということ。

DIRECTOR



監督ロバート・ゼメキス
ROBERT ZEMECKIS

ロバート・ゼメキスはシカゴのサウス・サイド出身で、ハリウッド映画界の次代を担うプリンスの一人と目されている。

1949年生まれ。1973年に南カリフォルニア大学の著名な映画学科を卒業した。

脚本家でプロデューサーでもある仲間のボブ・ゲイルと二つの初期作品を手掛けた後、ゼメキスは続け様に「ロマンシング・ストーン／秘宝の谷」、「バック・トゥ・ザ・フューチャー」という大ヒットを飛ばし、一躍売れっ子監督の仲間入りを果たした。

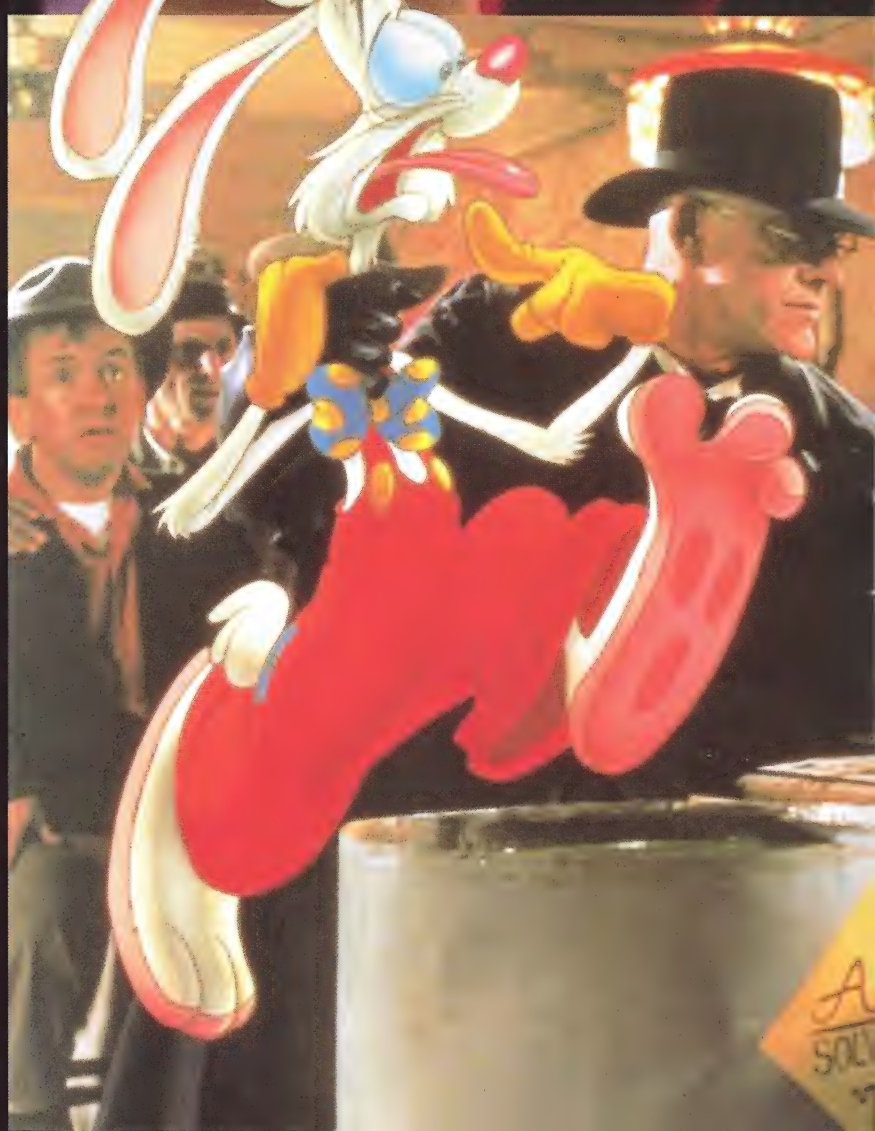
特に「バック・トゥ・ザ・フューチャー」は、「ロックンロール好きの若者が経験するタイムトラベル、ロックとコメディと冒険と科学と空想に満ちた映画」との素晴らしい評価を得た作品だ。

ゼメキスの師であるスチーブン・スピルバーグも、「かなりいい線を行っている映画です。沢山のアイデアを目一杯積んだトラックをボブが運転して来てそのアイデアをすべて私の所でどさっと荷下ろしたという感じです。」と語っている。

「ロジャー・ラビット」には、多額の製作費が掛かっており、業界での前評判もかなり良いだけに、この作品をヒットさせられるかどうかについて、慎重に言葉を選びながらも、ゼメキスは、極めて自信に満ちた発言をしている。「以前に始めからヒットすると誰もが期待していた映画を２本撮らせて貰いましたが、不発に終わりました。その後で取り上げる人もなく、５年も放っておかれた作品を手掛けたら大ヒットになったのです。何がヒットにつながるか誰にもわからないんじゃないかな」

作品 「抱きしめたい」'78監督(製作総指揮スピルバーグ)、「1941」'79脚本(監督スピルバーグ)、「ユーズド・カー」'80監督(製作総指揮スピルバーグ)、「ロマンシング・ストーン／秘宝の谷」'84監督、「バック・トゥ・ザ・フューチャー」'85監督(製作総指揮スピルバーグ)「世にも不思議なアメージング・ストーリー／第３話・真夜中の呪文」'86監督(ＴＶフューチャー)

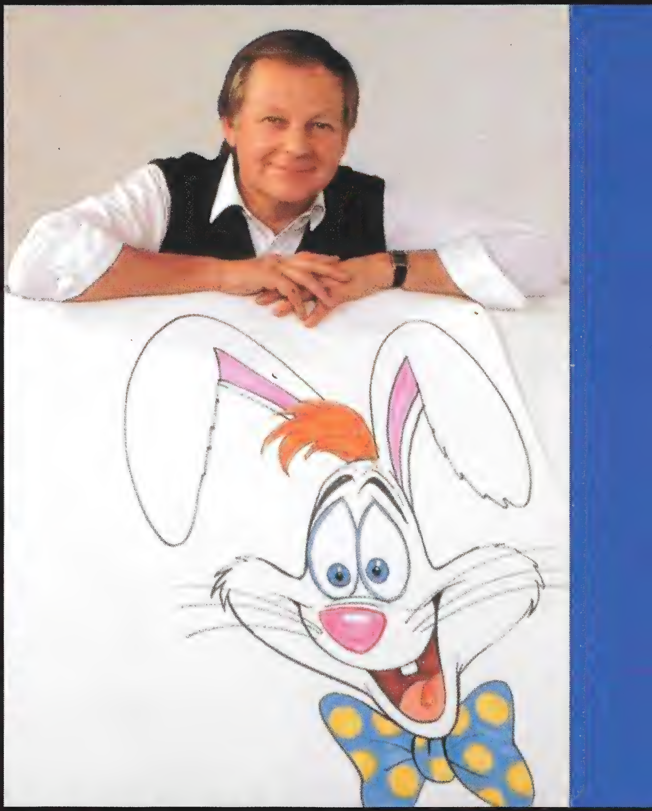








ANIMATION DIRECTOR



アニメーション・ディレクター

リチャード・ウィリアムス
RICHARD WILLIAMS

1933年、カナダのトロント生まれ。

15歳の時にすでにディズニーのもとでアニメの仕事をしており、49年から53年にかけて、カナダでCMを作り、グラフィック協会で仕事をするかたわら、美術学校へ通ったというから、天才といおうか、早熟といおうか……。53年から55年にかけてはスペインに住み、絵を描き、ジャズ・バンドでトランペットを吹いていた。以後、イギリスに定住し、中編「小さな島」'58、さまざまなTVCM、「何かいいことないか子猫チャン」'65、「007／カジノロワイヤル」'67「ピンク・パンサー２」'74などのタイトル・アニメを手がけた。

〝A Christmas Carol〟で72年度アカデミー賞を受けた。

「〝ロジャー・ラビット〟の為に16万5000枚のセル画の製作に没頭することになるでしょう。ディズニー映画の秘密は、その人間性にあります。アーティスト、クラフトマン一人一人の個性が作る技がなせるものです。100万年経ってもコンピューターでは表現できないでしょう。」

「アニメーションは、ルイ・アームストロングのトランペットみたいなものだと思います。彼のトランペットは音ひとつ聴いただけで〝サッチモだ〟と分かりますからね。」

いずれもウィリアムスのことば。

作品「小さな島」'58〝A Christmas Carol〟（末）'71「アンとアンディの大冒険」'74。


who framed
ROGER RABBIT
TM









INTERVIEW



ロバート・ゼメキス監督「ロジャー・ラビット」を語る

——今回の映画でもっとも難しかったのはどこでしょうか？

RZ　何と言っても、この映画で試みたことは、映画の歴史の上で、初めてだったということです。「南部の唄」でも、アニメーションと実写の合成はありましたが、それは部分的なものにとどまっていました。全篇を、アニメーションと実写がドラマチックに交錯しながら進んでいくという試みは、この「ロジャー・ラビット」が最初の経験なのです。そこに一番の難しさがありました。大きな問題は２つありました。同じ１つのシーンにアニメーションのキャラクターと人間が同時に出る場合に、ドラマのイリュージョンを起こさせなければなりません。１つは技術的にそれが可能か、ということ。もう１つは、見ているお客さんが感情的に、ドラマの中に入っていけるかという２つです。

技術的な点については、実写の俳優とアニメーションのキャラクターが異和感なく見えるかどうか、非常に綿密なテストをく

り返しました。そして、可能だ、と判断して撮影に入ったのです。

撮影の時、一番問題になったのは俳優のことでした。彼らは何もないところで演技をしなければならなかったのです。これは非常に難しいことでした。もっとも、難しいと言えば、監督の私も大変な問題を抱えてしまいました。自分が撮った場面が、実際どういう風にあがっているかを知るのに、２年も待たなければならなかったんです！合成とかなにやらありますからね。でも、その２年間は、とても不安だったんです。

——ディズニーのスタッフと仕事してどんな感想をもたれました？

RZ　とても素晴らしいものでした。特に、ディズニーが、「ロジャー・ラビット」のような大プロジェクトを進める気運にあり、年齢層を問わないアニメを作ろうとしているこの時期に、一緒に仕事が出来たことはとても幸運だったと思います。何より、前人未踏の企画にトライし、リスクが大きいにもかかわらず、巨額の製作費を投下したディズニーの勇気を称えたいと思います。

——この作品は30〜40年代のハードボイルドの雰囲気が濃く出ていますが？

RZ　30〜40年代のハードボイルドや、フィルム・ノワールは嫌いではありません。ミッキー・スピレーンや、マイク・ハマー、ハンフリー・ボガードの一連のものなどは好きです。でも、自分でああいうジャンルの映画を撮ろうと思う程、熱中している訳でもないのです。「ロジャー・ラビット」をハードボイルド風にしたのは、シナリオの設定でもあるのですが、カートゥーンのウサギと、このジャンルは、とても相性がいいからなんです。

——監督の作品は、特にクラシックな映画への傾斜が見られるのですが？

RZ　自分でも何故魅かれるのかはよくわからないのですが、「バック・トゥ・ザ・フューチャー」は話自体が、タイム・マシンで過去へ戻るもの、「ロマンシング・ストーン」は、設定は現代ですが、スタイルに過去のアドベンチャー・フィルムの感覚を採り入れています。考えてみると、50年代後半から60年代初めにかけてのアメリカのあの時代が、私が一番好きな時代だと思うのです。オプティミズムにあふれ、ポップ・カルチャーが産ぶ声をあげていた頃で、私自身はまだ子供でしたが、やはり、その時代が好きで、そこへ行くのでしょう。

——「ロマンシング・ストーン」のキャスリーン・ターナーがジェシカの声で出ていますね？

RZ　シナリオを検討したり、キャラクターを作ってる間ずっと彼女の声が聞こえてたんです。ああいう感じの声だと思って作業を続けていたんですが、実際に声優のキャスティングを始めてみると、彼女のような声の女性はめったにいないんです。やはり本人に限るということで、電話したら快くＯＫしてくれました。好意で出演してくれたのでクレジットには名前は出ていませんが、非常に楽しんで演ってくれました。



——シナリオ以降の段階で監督のアイデアでつけ加わったことはありますか？

RZ　最初の段階では現代を舞台にしていたのですが、私が少し前の時代にもっていきました。過去を舞台にした方が、見ている方は細部にとらわれずに映画の中に入りこめますし、もう一つ、私はアニメーションを現在のリミテッド・アニメじゃなく、30〜40年代の完璧なフル・アニメでやりたかったのです。技術的な統一という意味でも時代をさかのぼらせたかったのです。それと、ドゥーム判事という悪役を登場させたのも私のアイデアです。最初は、単なる推理ドラマだったのですが、それでは見ている人を引っ張っていくのは難しいので、強烈なキャラクターをつけ加えたんです。

——他にも監督の意向で入ったキャラクターはいますか？

RZ　この映画を撮るという話があった時に、私が出した条件に、ディズニーとワーナーの両方のキャラクターを使いたいというのがありました。あの時代のアニメのキャラクターを全部集めてこそ、この映画は意味を持つんで、でなければ、これだけのお金をつぎ込む価値も、これだけの苦労をする意味もないと思ったんです。いろいろなキャラクターを組み合わせることに面白さがある作品ですから、強くリクエストしたんです。

——監督はどんなアニメ体験を経てきたんですか？

RZ　TVアニメを見て育った世代ですから子供の頃はよく見ました。でも、絵が上手く描ける訳でもないし、特に熱狂的なファンではありませんでした。映画学校でも映画のジャンルの一つとして勉強しましたが、それ以上のものではなかったのです。かえって、アニメに没頭していなかったために、アニメばかり気にせず、距離をおいて客観的に作ることができたという点で、この映画にはプラスになったと思います。

——アニメーションの演出についてはどんな苦労がありました？

RZ　とても時間がかかるということですね。専門家じゃないので細かい点はわかりませんが、私としては、人間の俳優を動かすのと同じ感じで、アクションや感情の動きを出すように注文をつけていきました。キィになるアニメーターは35人いましたが、それでも２年かかっています。言いかえると、２年間にわたって35人の俳優に毎日演技をつけた訳で、とても大変な作業をしたことになる訳です。



トゥーンタウン紳士録



●評論家
森 卓也

「ロジャー・ラビット」の話題の一つは、アニメーション映画――というよりも、漫画映画(カートゥーン)のスターたちが、続々とゲスト出演することだ。主役のロジャー・ラビットを始め、ベビー・ハーマン、ジェシカ、自動車のベニーetc. が、オリジナルのカートゥーン・キャラクター(この映画でいう "トゥーン族")なのだから、壮観であると同時に目まぐるしく、混乱しそうになる。で、以下、順を追って、カートゥーン界のスター連をご紹介しよう。

まず、マルーン・カートゥーン・スタジオの、オフィスの窓の外にダンボ(「ダンボ」'41)が現れる。ちなみに、実写のベネシアン・ブラインド越しのダンボは、最も面倒な合成の一つだったという。ステージの表を掃除しているのは、「ファンタジア」('40)の、「魔法使の弟子」のホウキたち。その横で男が、サックスで、デュカ作曲のメロディを吹いているのがおかしい。やはり伴奏がないと働かないのかな。さらに中庭へ、これも「ファンタジア」の「時の踊り」の、カバのバレリーナが降りてくる。以上、言うまでもなくディズニーのキャラクターである。

続いて「インク・アンド・ペイント・クラブ」(ぴったりのネーミングだ)のステージに、ピアノのデュオとして登場するのが、ドナルド・ダック(ディズニー。'34年デビュー)と、ダフィ・ダック(ワーナー。'37年デビュー)という、カートゥーン界の二大アヒル。かんしゃく持ちでいたずら好き、好戦的という共通した性格の二匹の共演が、無事に終わろうはずもない。

続いて、フライシャー兄弟がパラマウントでつくった、往年の(この映画の時代背景である'47年の時点で、すでに往年なわけだ)セクシーガール、ベティ・ブープが登場する。彼女だけモノクロというのが泣かせる。'31年に正式にデビューし(それ以前に、名もスタイルも定まらぬまま出ていた作品が数本ある)'39年にリタイアしたベティちゃんは、すべてモノクロだったからだ。ただし「ベティのシンデレラ姫」Poor Cinderella('34、二色シネカラー)という別格作品が、一本だけある。(カラープリントは現存しないらしい。私はモノクロ版しか見たことがない)なお、近年、TVやビデオで見かける、どぎついカラーのベティは、旧作のフィルムから、韓国で描き写して着色、再編集したものである。

マービン・アクメが殺された現場の検証に、二日酔いの探偵エディ・バリアントがでかけると、トゥーンタウンから、尻に火のついた八の字ヒゲの小男が、塀を越えて飛びこんでくる。これがワーナー漫画の、二挺拳銃のヨセミテ・サムである('45年デビューTVの「バッグス・バニー・ショー」の日本語版では、なぜかペコスと呼ばれていた)。しばしばバッグス・バニーと対決し、してやられては一層カッカと怒り狂う、エネルギッシュな愛すべきじいさんである。このヨセミテ・サムの名は、あとから探偵氏にかかわってくるから、憶えておいて頂きたい。

探偵とロジャー・ラビットが隠れた映画館で上映中のカートゥーンは、ディズニーの、「グーフィの健康法」Goofy Gymnastics('49)。既製の短編である。

さて、トゥーン族嫌いの探偵が、容疑者を追って、久しぶりにトゥーンタウンへ乗りこむシーン。ディズニーの「シリー・シンフォニー」で見かけたキャラクターや、どこの漫画にも出てきそうな連中が、画面狭しとはねまわり、とても面倒みきれない。たとえば、探偵の顔のあたりを飛びまわって歓迎するハミングバードは、ディズニーの、アニメ合成長篇「南部の唄」('46)や、短篇「ジャングルのおどけ者」Clown of the Jungle('47)のそれだろう――なぞと詮索していたら、いくらスペースがあっても足りない。

で、以下、探偵に直接からむキャラクターについて述べよう。まず。エレベーターボーイとして登場するのが、テックス・アヴェリー(演出。エイヴリーと発音するのが本当らしい)がつくった、バスター・キートンのごとく無表情な、犬のドルーピー(MGM。'43年デビュー)。続いて、ジェシカかと思いきや、似ても似つかぬ好色オバさんが、探偵を追い廻す、この猛女(ここではリーナという名だが)も、アヴェリーの「(TV)狼とシンデレラ」Swing Shift Cinderella('45)、「(TV)田舎娘と都会狼」Wild and Wolfy(同)などで、スケベなオオカミを、逆に追い廻すオバさんそのもの。(このあたりは、版権とは関係ないらしい)。

オオカミならぬ探偵が、トイレと思って逃げこんだ所は、実は摩天楼の外壁(はるか下を飛行機が通り過ぎるのがいい)――というのも、アヴェリーの十八番。この、ギャグまたギャグのシークエンスは、カートゥーンの過激なギャグのファンには、こたえられない珍景で

ある。'80年に世を去ったアヴェリーは、ワーナー、MGM、ユニヴァーサルなどの、エキセントリックな笑いを競う作品群を、テックス・アヴェリー・スクール(派)と総称することもあるほどの、ビッグな存在なのだ。高所からの墜落と、重量物(冷蔵庫、金庫、ピアノetc.)の頭上への落下は、アヴェリー派の、二大不条理ギャグ(パターン)なのである。(つい力説してしまった)

探偵がぶらさがったポールに巣をかけていたのが、カナリアのトゥイーティ('42年デビュー)。一見かわいいが、無邪気を装った意地悪さは、ごらんの通り。さらに落ちてゆく探偵の、左手にミッキー・マウス('28年デビュー)、右手にバッグス・バニー('40年デビュー)が現われる。ディズニーVSワーナーの看板スターの顔合わせである。

ここでバッグスが、探偵をからかうように言う「どうしたんだい、先生?(What's Up, Doc?)」というきまり文句が、いかにアメリカでポピュラーリティーがあるかは、それが映画の題名にまでなっている事でもわかる。ピーター・ボグダノヴィッチ監督の「おかしなおかしな大追跡」('72)の原題が、それ。主役のバーブラ・ストライサンドをバッグス・バニーになぞらえるという、いわば「ロジャー・ラビット」の先駆ともいうべき、マニアックなコメディだった。(「ロジャー・ラビット」の中でも、探偵が、マルーン所長の背後から拳銃をつきつける場面で、「What's Up, Doc?」と声をかける)

大詰めの活劇で、ドゥーム判事が、トゥーン族皆殺しのローラーにまきこまれる。判事にくっついた強力なニカワも、カートゥーンおなじみの小道具だ。ブチ抜かれた壁の向こうの、花が歌い、恋人同志の木がスイングしている風景は、ディズニーの「シリー・シンフォニー」の一篇「花と木」Flowers and Trees('32)の一場面。カートゥーン最初の、三原色テクニカラーで、この年のアカデミー賞を受けた、由緒ある作品である。

そして、トゥーン族全員揃い踏みのエンディング。ディズニーでは、白雪姫と七人の小人、三匹の小豚、おや「こぐま物語」('47)の第二話の、歌う竪琴までいるぞ……という有様で、とうていチェックしきれない。

ここでウッディ・ウッドペッカー('40年デビュー、ユニヴァーサル)が、アハハハーハ、アハハハーハと、例の笑い声を聞かせる。ウォルター・ランツ(製作・演出)の看板スターである。

後姿で登場し、客席をふりむいて「こ、こ、こ、これでお終いだよ。皆さん!(Tha…Tha…Tha…That's all folks!)と言うのは、ワーナーの古参スター、ポーキー・ピッグ('35年デビュー)。このセリフも「おかしなおかしな大追跡」のラストで"引用"されたほど、有名である。でも、これで終っては、あまりにワーナー色濃厚なので、さらに「ピーター・パン」('53)の妖精ティンカー・ベルが、往年のTV番組「ディズニーランド」風に締めくくり、タッチストーン(ディズニー)製作の面目を示す。

ここで、物語の核というべき、アクメ・ファクトリーの由来についても、ふれておかねばなるまい。往年のワーナー漫画の演出者のひとり、チャック・ジョーンズは、ルーカスやスピルバーグに敬愛され、ジョー・ダンテの「グレムリン」('84)「インナースペース」('87)にゲスト出演したほどの人気者だが、彼がつくった傑作シリーズに「ロードランナーとコヨーテ」('49年スタート)というのがある。全篇セリフなしで、いつも腹を空かせたコヨーテが、超スピードで荒野を駆ける怪鳥ロードランナーを捕えようと、あの手この手を試みては、手痛い失敗をくり返す——その中で、コヨーテが、通信販売でとりよせたアクメ工業の、種々のスピード装置、さまざまな罠が、彼の失敗を一層エスカレートさせ、観客の腹の皮をよじらせた。(この二匹も、「ロジャー・ラビット」のエンディングに姿を見せる)

アクメというネーミング自体は、わりに一般的なものだ。アクメという一流の映写機メーカーもあったほどである。日本風に言えば"最高ファクトリー"といったところか。アタマにAのつく名称が好んで用いられるのは、電話帳で、最初に出てくるという利点のためもある。しかし「ロジャー・ラビット」でのそれは、明らかに「ロードランナー」から引用し、ふくらませたものだろう。

最後に——これはカートゥーンに関係はないのだが、書いておこう。ロジャー・ラビットを捕えようと、ターミナル・ステーション・バーへ乗りこんだドゥーム判事を、店の客がからかうくだりで、「ハーヴェイ」という名が出る。

これは、ブロードウェイで大ヒットした、「ハーヴェイ」という舞台劇のこと。ハーヴェイという身長6フィートの白兎に、無二の親友としていつも連れだっているという幻想にとりつかれた、気のいい男が主人公の、心あたたまるコメディである。'50年に、ヘンリー・コスター監督、ジェームズ・スチュアート主演(絶品!)で映画化され、日本では'52年に封切られた。

以上、ご存知の方には蛇足でしかなかろうが、ディズニーの長篇以外のカートゥーンについては、まださほど知られていないのが、日本の実状だと思う。観賞の一助にもなれば幸いです。




EEP

PRODUCTION NOTE

■「ロジャー・ラビット」での人間とアニメの共演は、何よりも技術の勝利だった。実写のフィルムにアニメーションの作画を合成し、さらに様々の特殊効果を重ねるため、実写のカメラには、ビスタビジョンの大画面用カメラを特注して撮影した。ロンドンの撮影所では、この大がかりなカメラのおかげでパニックに襲われる程。しかも、セットの中では、15人の人形師が、映画の中でアニメのキャラクターが使うたばこや、ピストルと言った小道具を操っている。この面倒な撮影のため、予定は大きく遅れていった。一方、326人のアニメーターがとりかかったアニメの方も膨大な作業が必要だった。総コマ数82,080コマ。アニメーション・ディレクターのウィリアムスは、10秒のシーンに必要な1,440のアートワークを2週間であげることさえあった。それでも実写は2週間、アニメは3カ月の遅れで仕上がった。二つを合成し、特殊効果を入れるのはＩＬＭの仕事だ。立体感を出すために、一コマ一コマ陰影や光をつける緻密な作業を行なっていく。通常のＳＦＸ映画10本分に相当する、1,035の光の効果も使われている。ハイテク技術から手造りのアイデアまで総動員しての、繊細で緻密な作業が積み重ねられたのだ。こうして、アニメのキャラクターは現実の世界に生を受けることになった。



■アニメと実写が対等の世界を作り出したこの映画では、小道具もいろいろ登場。映画の面白世界を何倍にも広げている。

《溶解液》"トゥーンは死なない" という伝説は、ドゥーム判事の発明したこの溶解液で破られた。テレピン油が主体といわれているが成分は不明。人間には無害だが、トゥーン達はこの液につけられるとたちまち、元の絵具にもどってしまう。トゥーン達の恐怖の的、この溶解液の陰には、或る巨大な陰謀がかくされていた。

《トゥーンピストル》トゥーンの弾丸を使用するため、ミサイルのようにどこまでも目標を追いかけてゆくので一発必中。と、実は探偵エディも思っていたのだが、長い間ケースに入れぱなしになっていたため感がにぶり、ミスすることもしばしば。悪漢を追いつめたどたん場でこのミスが出て……。

《パンチハンマー》ひと目見ただけでは、なんのへんてつもない、プラスチック製のおもちゃのハンマーに見える。ところがこれをひと振りすると、バネ仕掛けの強烈パンチが飛び出す。有効射程は約20メートル。探偵エディは、絶体絶命のピンチをこのハンマーで切り抜けた。

《ホール》トゥーンタウンに巨大な工場を持つ面白オモチャの天才、マービン・アクメが創り出した傑作中の傑作。一見、ビニール製のただの黒丸のシールだが、これをぴたっと物に貼ると、木に貼ろうと、鉄に貼ろうとそこはもう黒い抜け穴。どこへ続く穴かはまだ分っていない。探偵エディは、この穴を利用して、一体何をしたのか？



1. こういうシーンが必要な場合は…。



2. まず実写を撮る。水も一緒に。



3. 実写のコマを複写拡大して、そこに下書きを描く。



4. 3を基に一コマずつセル画にする。



5. 4を2と合成し、影や特殊効果をつけて完成。

誰も思いつかないところに映画の宝庫があった

●マンガ家
手塚 治虫

ハリウッドではーとき、映画の沈滞を防ぎとめようとして、大スター競演の大作がはやったことがありました。たとえばバート・ランカスターが大御所ゲイリー・クーパーを迎えて「ヴェラ・クルス」をつくったり、おなじくバートがカーク・ダグラスと組んで「OK牧場の決闘」ができたり、といった具合です。この大スター主義は、おしまいには一線級スターをズラリと並べたオール・スター映画に発展しました。一連のパニック映画とか、「史上最大の作戦」のような戦争映画です。でも、たとえばミッキー・マウスとバッグズ・バニーが同じ画面でおしゃべりをするといったたぐいのアニメのスター競演は、まさか誰も思いつかなかったし、思いついたとしてもつくれるとは誰も信じなかったのではないでしょうか。

その理由はいろいろありますが、最大の壁は、そのアニメの主人公達についている利権の問題です。アニメキャラにはそれぞれに著作権と同時に版権が確立していまして、ことに、おもちゃや食品、衣料品や本といった商品についているアニメキャラは、それぞれ製作者と業者の間にがっちりと契約がなされていて、莫大な利益を生み出します。だからよその映画に自社のキャラクターを貸し出すなどということは、複雑な利権がからむために、人間のスター競演とちがって、まず、不可能に近いのです。だからディズニーはディズニー、ワーナー漫画はワーナー漫画と、それぞれの権利所有者が固く守っている限り、まずミッキー・マウスとバッグズ・バニーが共演するなどということはできません。

ところが、その夢の企画を大胆にも立てたのがディズニー・プロでした。「ディズニーの手持ちのスターと、ポパイやベティ・ブープ、バッグズ・バニー、フィリックス・ザ・キャットなどを、一堂に集めたオールスター映画を作ってやろう！」この企画が生まれたのは1980年のはじめでした。そして、そんな厄介な企画が実現するのかどうか、アメリカ中のアニメキャラの所有会社にアタックがはじまったのです。

ディズニー・プロはもちろん企画者ですから、ミッキー、ドナルド、グーフィ達や白雪姫からダンボに至るスターは全部タダで使えます。バッグズ・バニーを抱えるワーナー・ブラザーズをOKさせたことはすばらしいプラスでした。これでダフィー・ダックや、ポーキー・ザ・ピッグ、それにれいのドタバタ走り廻るロードランナーなどが共演できることになりました。一方、キング・フィーチャーズ社という版権会社が持っているポパイとベティ・ブープは、ベティの方だけが貸し出しOKとなりました。ポパイは、その頃、別のアニメ会社がポパイのテレビ用映画をつくったりしていたためについに借りることはできませんでした。ウオルター・ランツというプロダクションからは、けたたましい声を出す人気者ウッドペッカーを借りることができましたし、MGMからはドルーピイという犬のキャラを借りました。ここのトップスターであるおなじみのトムとジェリーは、いっさいセリフがしゃべれないということで、この映画には使わないことになりました。また、猫のフィリックスもOKにはなりませんでした。

しかし、借りたものだけでも大変です。これはちょうど東映が東宝や松竹のスターまで動員して、「忠臣蔵」をつくったようなものです。ヒーローとかチョイ役の差はあっても、それぞれの見せ場があり、それぞれのアニメキャラのファンが満足しなければならないのですから厄介な企画です。

しかし正直いって、この企画ができた頃のディズニー・プロには、この大作をつくり上げるだけの自信はなかったのです。それに莫大な経費と（当初の予算は2750万ドルでした）たくさんの技術開発が必要です。しかしディズニー・スタジオの会長、J・カッツエンバーグが新しく任命されて、彼はゴーを出したのです。「当るかどうかは不明だ。しかしはっきりしていることは、これが、全く先駆的な実験だということだ。ディズニー・プロならまだそれがやれる！」

この企画は1982年に、ディズニーからロバート・ゼメキスへ話が持ちこまれました。ゼメキスはこの時はっきり断ったそうです。「今のディズニーに、こんな冒険ができるものか」彼はまだ31歳の新進でした。

ところが、それから３年後、今度はディズニーはスピルバーグへ話を持って行き、スピルバーグがゼメキスに改めて話を通したそうです。

その時の企画内容は、すでに、実写とアニメの合成という骨組みができ上っていました。



ゼメキスは､｢アニメを実写に重ねた映画は沢山作られてはいるが、どれもこれもアニメが浮いてしまって、目立ちすぎるし異質で、実写を殺してしまっている」と思いました。「だから、ぼくは実写がメインでアニメがサブだというふうに作らなければならないと思った。アニメを、目立たないようにひかえめに組み込まなきゃだめだと確信した」と彼は語っています。

それに一番の問題は、じっさいにアニメが実写とうまく組み合うように描けるのか、ということでした。

ご存知の通り、映画のフィルムは１秒映すのに24コマのすこしづつ動いた写真からできています。従って、あたりまえなら、アニメだって一秒あて24枚の画を描いて、一コマづつ写真にとって映していくという手間がいります。

しかし、ディズニーあたりから、アニメは、同じ絵を２コマづつ撮影して、１秒あたり12枚の絵でも動いて見えることがわかって、絵の手間の節約のために、どこでもその方法がとられるようになりました。(日本だけは同じ絵を３コマづつ撮影して１秒につき８枚の絵ですませる方法がとられています。これだともっと時間と手間がはぶかれます)。

ところがです。実写の映画はどうかといいますと、アニメのように何コマかが同じ絵ということはありません。一コマづつ常に動いています。24コマがみんなすこしづつ違う画面です。ですからもしアニメと実写の合成ということになりますと、その実写の絵にあわせたアニメを同じ数だけ描かねばならず、つまり、１秒あたり24枚の違う絵が必要になるわけです。

１秒12枚ですむアニメの絵を24枚も描くことになると、無論、その経費も倍近くふくれ上ります。また、ディズニー・プロにはそれをこなせるベテランの動画家がそんなにいるわけではありません。だから、ゼメキスは、はっきりこう思ったのです｡｢この映画はディズニー・プロじゃ無理だ」

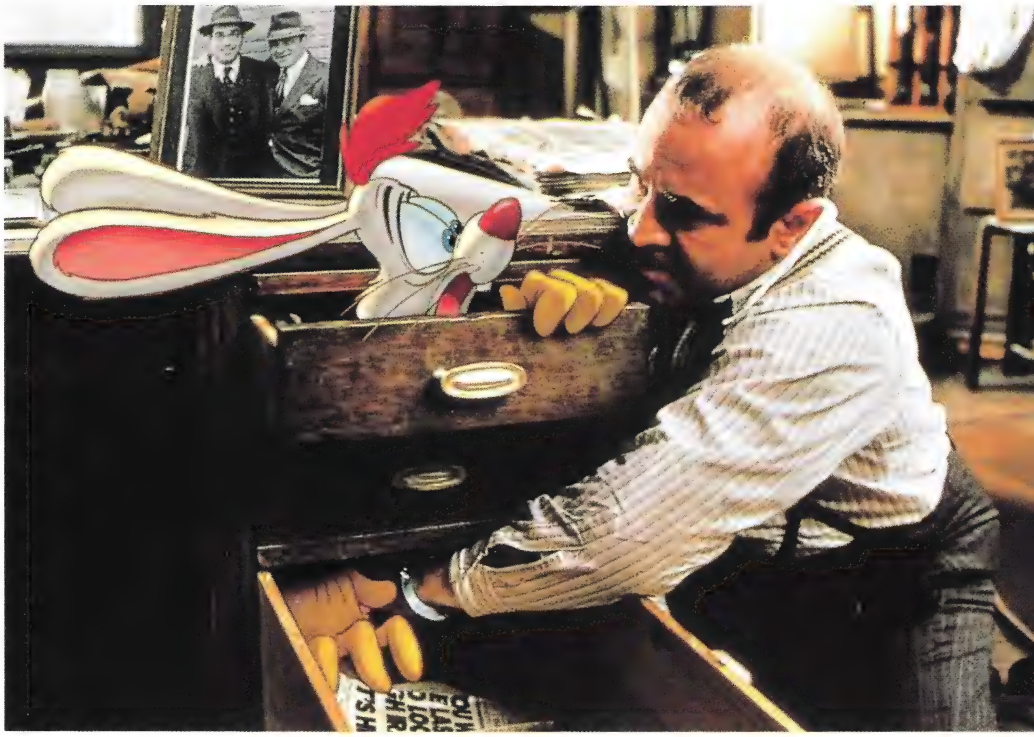
そこで、プロデューサー達はそんなアニメ技術を持っているベテラン・アニメーターを、別に探さねばなりませんでした。そして、白羽の矢が立ったのがイギリスのリチャード・ウィリアムスでした。

日本ではあまり知られていないこの人は、「ピンク・パンサー」のキャラクターというと、ああそうかとうなづく方もいるでしょうか、おもにCMアニメを作っているイギリス屈指の動画家で､実験アニメもたくさん作り、それでアカデミー賞をとっています。

はじめ乗り気でなかったR・ウィリアムズは、監督のゼメキスに会い、同じ動画家の先輩でバッグズ・バニーの生みの親でもあるチャック・ジョーンズに電話ではげまされて、ついに引き受けることになりました。

R・ウィリアムズは独り立ちの作家で、会社にしばられている多くのアニメーター達と体質が違います。ディズニー・プロのアニメーターを勝手に連れ出して自分のフィルムを見せたりするものですからディズニー・プロの古い頭の重役達はカンカンになって怒りました｡「まあ、まあ」となだめたのはスタジオの新会長カッツエンバーグでした。

「兎に角古い体質のディズニー・プロじゃあとてもこの作品はできなかっただろうね、その点、カッツエンバーグさんはよく話もわかるし決断力もあり、どんなことでも自分の責任の上でやらせてくれたよ」とゼメキス監督は述懐しています。



一方で、スピルバーグはこの映画の実写部分の主役、つまり人間の俳優を探していました。

映画をヒットさせるという点では大スターを使うのが一番安全でした。ポール・ニューマンやハリソン・フォードの名が挙がりました。しかし、結局は演技力を買われてボブ・ホスキンスにきまったわけは、実は次のような次第だったのです｡｢この映画では人間にアニメのキャラと組んだ動き——同じようなアクションを要求する所がいっぱいある。転んだり、ぶっかったり——映画の中で、まるで人間はアニメのようにガチャガチャと動く。とても大スターにそんなことはさせられないし、させて、もし怪我でもさせたら、とんだことになるだろう。実際、ボブ・ホスキンスもかなり痛いつらい目にあった。ロジャー兎と事務室の中をドタバタするシーンでは引出しの中で腕にアザが出来てしまった。彼だから一生懸命やってくれたんだ」というゼメキス監督のことばどうり、俳優にとっては大変な重労働だったようです。なにしろホスキンスは体じゅうワイヤーをくくりつけられ、ほうり出されたり、壁をぶち破ったりするのですから。しかし流石に高層ビルの上からホスキンスが落っこちる場面は、実際に落としたのではありません｡｢ワイヤーで吊った彼に扇風機をあてて服がはためく感じを出した上で、カメラを大スピードで引いたんだ」

びっくりするのは、アニメのキャラが手に持っている品物——ピストルや皿や電話——がアニメでなく本物なのに、どうやってアニメと組み合わせたのだろう。という点です。たとえばボブ・ホスキンスがチャイナタウンの酒場へはいって行くと、足許をチョコマカと走り廻っているのは「メリー・ポピンズ」に出てくるペンギンのボーイ達なのですが、その手にしているお盆とグラスは実写なのです。

さらに、水の中から引きあげられたロジャー兎が口から吐く水は、本物の水です。こういった精密な特撮は、ほとんど、そのアニメのキャラを合成する位置でその品物だけを動かすという細工をしたもので、一種の人形映画の技術と同じなのです。そこにアニメのキ

ャラを載せるとその仕掛けがかくれてしまうというわけです。

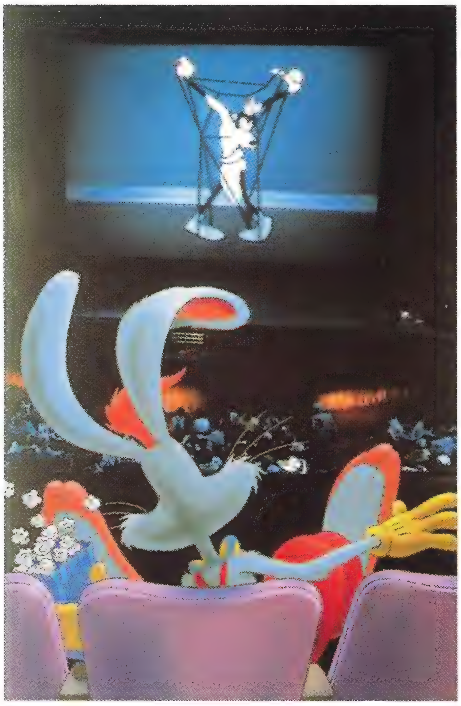
さて、この作品の最大のアイデアの勝利は、アニメのキャラ達がハリウッドの近くに、トゥーンタウンという自分達の町をつくって、そこに住んでいるという設定でありましょう。この映画の時代背景は1947年ということですから終戦直後です。その当時、まだアメリカでは人種偏見がまかり通っていた時代で、たとえば日本人二世達もやっと収容所から開放はされたもののリトル・トウキョウのみすぼらしさは目をおおうものでしたし、黒人階級はあからさまな蔑視の中でこき使われていたのです。このトゥーンタウンの住人達も、生身の人間から、一種の差別でみられています。彼らは二流市民です。彼らは独自の法律と重力無視の法則を持っています。主役のロジャーは兎のくせに人間(アニメの)の美人を奥さんに持っていますが、これとて、兎が人間と愛し合い結婚するなんていうことはこの街ではごくあたりまえのことなのだと思えばそれまでです。

このユニークで新鮮なアイデアにもとづいて、この作品に登場するアニメのキャラ達は、1947年頃にアメリカで人気を博したものばかり。つまり懐メロスターという訳ですからたとえばピンクパンサーとか、クマゴローとか、マグーとかいったルーキーは出ておりません。それからこれも傑作なのは、白黒フィルム時代に活躍したスターはちゃんと白黒で出てくることです。ベティ・ブープは戦前のアニメのスターですがカラーに溢れた酒場シーンにモノクロで現われて「カラーになってから仕事が減って……」などとグチをこぼすので思わず笑ってしまいます。

こういうレトロ趣味を数えるときりがありませんが、ひとつ極め付きを挙げてみましょう。悪人のドゥーム判事が、ロジャーの隠れているスナックへやって来て「兎はいないか！」と叫びます。すると何人かの客が「ああ見たよ！」と答えます。観客はここで、ロジャーが居ることをばらされるのではないかとヒヤリとします。すると客の一人はすかさず「ハーヴェイなら見たぜ！」といって大笑いするのです。

このハーヴェイというのは当時ニューヨークで当っていた芝居で、ある精神異常者にしか見えない大きな兎の名なのです。その男はいつも自分の傍にハーヴェイが居るつもりで空間に話しかけます。その芝居がヘンリー・コスター監督の手で映画になって昭和30年頃に日本でも封切られました。ジェームス・スチュアートがその男の役をし、とぼけた演技で観客を笑わせたものです。ハーヴェイはもともと目に見えないどころか実際に存在しないものですから、この「ハーヴェイなら見たぜ！」というギャグは、その名前を知っている映画ファンには大喜びされたものではないでしょうか。

ハリウッドの映画スタジオにはトゥーンタウンから貸し出されたアニメキャラが、いっぱい働いています。中でもスタジオの掃除をしているほうき君とは傑作。これは「ファンタジア」の中の「魔法使いの弟子」に登場する、ひとりでに水を汲んで来たりする魔法のほうきです。その横の階段を下りてくるのが、おなじく「ファンタジア」の「時の踊り」に登場する河馬のソロダンサー。そして、カメラが大勢の牛をなめていきますが、それぞれ



がディズニー・アニメのなにかの作品に出て来た牛達で、一番はじめに、ちゃっかりとクラベル・カウ（ミッキー・マウス作品に出てくる牝牛のおばさん）がまじっていて、それだけ白黒に描かれている、といった具合。

悪人ドゥーム判事の手下共がアニメキャラのイタチというのも面白い。これは日本では未封切りのディズニーの長編「イカボッドとトード氏の冒険」に出てくる悪イタチです。戦後まもなくアメリカで封切られたもので、淀川長治氏がはじめてハリウッドを訪れた時、最初に観た戦後のディズニー映画が、実はこの作品だったそうです。

ボブ・ホスキンスが扮する探偵がトゥーンタウンに乗り込んで、トンネルをくぐると、そこはディズニーのシリー・シンフォニイ・シリーズの大通りです。ディズニーは当時、アニメの背景を、水彩絵具に白絵具をまぜて描かせていたそうですが、ここでもわざとその手法をR・ウィリアムスは使っています。そして、その街路樹はなんとディズニーの最初のテクニカラー・アニメとして当時大ヒットした「花と木」のキャラなのです。ここまで凝ってくると、かなりマニア指向が強くて、「わかる奴はわかれ」といった感じ。

ボブ・ホスキンスがエレベーターに乗ろうとするとエレベーターボーイが犬のドルーピイで、このキャラ独特のニヒルなギャグが展開します。そのドルーピイの声を演じているのが、当のアニメーターのR・ウィリアムスなのです。ついでに書きますと、ベティ・ブープの声を演じているのは往年のベティの声優だったメイ・ケステルだそうですから、もうベティ・ファンにとっては堪らない懐しさでしょう。このように、アニメひとつひとつにもせい一杯のサービスがしてあって、この映画はぼんやり観ていても娯しいし、詮索好きが目を皿にして調べて行っても、奥が深く興味が尽きません。

しかし、なんといってもこの映画の最大の難関は、生身の俳優とアニメをどうやって対話させ、共演させるかということでした。実写の際はアニメキャラはそこに存在しない訳ですので、ホスキンスはじめ演技者は、視線をいかにもそこにアニメキャラが居るつもりで空間を見つめねばならないのです。ホスキンスは流石に、自分から1メートルたらずの前にロジャーが居るといった眼つきをし、眼の演技を上手にこなします。この芝居は大変だったでしょう。人間の眼というものは、なにもない空間を見つめることには馴れていなくて、どうしても背景に焦点があってしまうものですから、ゼメキス監督がボブ・ホスキンスを主役にOKしたのも、この視点をなにもない所に集中できる能力を見て感動したからだそうです。

いろいろ書きましたが、この映画がアメリカで大ヒットしたのは、結局、このいろいろな技術家や芸術家が結集して新機軸に最大限の情熱を注いだということでしょう。たしかにアイデア、物語、サーヴィス、すべての点で秀れていても、営業本位で割り切って作られたものには熱気がありません。「ロジャー・ラビット」は探偵劇で一種の風変りな喜劇に過ぎませんが、その底に溢れているものは映画に人生を賭ける人々の熱気です。この点、日本映画の総体的な沈滞がささやかれている現在、この作品は学ぶものを多く持っているのではないでしょうか。

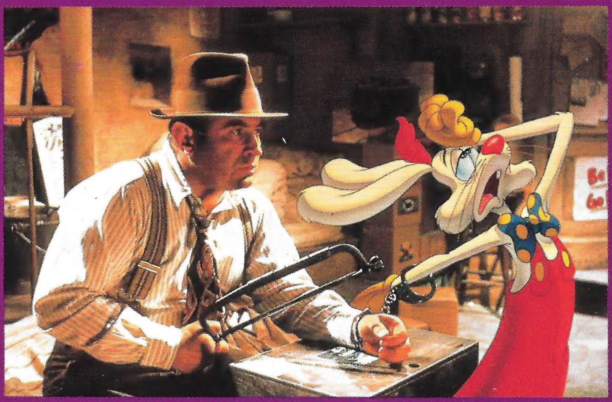




Who framed ROGER RABBIT™

スタッフ

監督……ロバート・ゼメキス
アニメーション・ディレクター……リチャード・ウィリアムス
原作……ゲーリー・K・ウルフ
脚本……ジェフリー・プライス、ピーター・シーマン
撮影監督……ディーン・カンディ
編集……アーサー・シュミット
音楽……アラン・シルベストリ
特殊視覚効果……インダストリアル・ライト&マジック
製作総指揮 スチーブン・スピルバーグ&キャスリーン・ケネディ
製作……ロバート・ワッツ、フランク・マーシャル
（共同製作シルバー・スクリーン・パートナーズIII／
タッチストーン・ピクチャーズ&スチーブン・スピルバーグ提供／
上映時間1時間44分／1988年度作品） DOLBY STEREO
一部上映館を除く



キャスト

エディ・バリアント……ボブ・ホスキンス
ドゥーム判事……クリストファー・ロイド
ドロレス……ジョアンナ・キャシディ
ロジャー・ラビット（声）……チャールズ・フライシャー
マービン・アクメ……スタッビー・ケイ
R.K.マルーン……アラン・ティルバーン



CAST

Eddie Valiant .... BOB HOSKINS
Judge Doom .... CHRISTOPHER LLOYD
Dolores .... JOANNA CASSIDY
Roger Rabbit .... CHARLES FLEISCHER
Marvin Acme .... STUBBY KAYE
R.K. Maroon .... ALAN TILVERN
Lt. Santino .... RICHARD LE PARMENTIER
Baby Herman .... LOU HIRSCH
Benny The Cab .... CHARLES FLEISCHER
Jessica's Performance Model .... BETSY BRANTLEY
Raoul (Director) .... JOEL SILVER
Augie .... PAUL SPRINGER
Angelo .... RICHARD RIDINGS
Arthritic Cowboy .... EDWIN CRAIG
Soldier .... LINDSAY HOLIDAY
Midget .... MIKE EDMONDS
Editor .... MORGAN DEARE
Kid #1 .... DANNY CAPRI
Kid #2 .... CHRISTOPHER HOLLOSY
Kid #3 .... JOHN-PAUL SIPLA
Blonde Starlet .... LAURA FRANCES
Forensic #1 .... JOEL CUTRARA
Forensic #2 .... BILLY J. MITCHELL
Mailman .... ERIC B. SINDON
Newscaster .... ED HERLIHY
Conductor .... JAMES O'CONNELL
Teddy Valiant .... EUGENE GUIRTERREZ
Mrs. Herman .... APRIL WINCHELL
Gorilla .... MORGAN DEARE
Betty Boop .... MAE QUESTEL
Daffy Duck .... MEL BLANC
Donald Duck .... TONY ANSELMO
Hippo .... MARY T. RADFORD
Yosemite Sam .... JOE ALASKEY
Smart Ass .... DAVID LANDER
Greasy .... CHARLES FLEISCHER
Psycho .... CHARLES FLEISCHER
Stupid .... FRED NEWMAN
Wheezy .... JUNE FORAY
Birds .... RUSSI TAYLOR
Toad .... LES PERKINS
Droopy .... RICHARD WILLIAMS
Lena Hyena .... JUNE FORAY
Tweety Bird .... MEL BLANC
Bugs Bunny .... MEL BLANC
Mickey Mouse .... WAYNE ALLWINE
Bullet #1 .... PAT BUTTRAM
Bullet #2 .... JIM CUMMINGS
Bullet #3 .... JIM GALLANT
Singing Sword .... FRANK SINATRA
Minnie Mouse .... RUSSI TAYLOR
Goofy .... TONY POPE
Pinocchio .... PETER WESTY
Sylvester .... MEL BLANC
Woody Woodpecker .... CHERRY DAVIS
Wolf .... TONY POPE
Porky Pig .... MEL BLANC
Stunt Arranger .... PETER DIAMOND
Stunts .... DEL BAKER, ANDY BRADFORD
CHARLES CROUGHWELL, STUART FELL
FRED HAGGERTY, REG HARDING
FRANK HENSON, TERRY JACKSON
VINCENT KEANE, DANIEL K. MOORE
DANNY O'HACO, BRIAN SMRZ
GREGG SMRZ, ROCKY TAYLOR
TERRY WALSH, JASON WHITE
BOB YERKES

TECHNICAL CREDITS

Directed by .... ROBERT ZEMECKIS
Screenplay by .... JEFFREY PRICE
& PETER S. SEAMAN
Produced by .... ROBERT WATTS
& FRANK MARSHALL
Based on the book
"Who Censored Roger Rabbit?"
by .... GARY K. WOLF
Executive Producers .... STEVEN SPIELBERG
& KATHLEEN KENNEDY
Director of Photography .... DEAN CUNDEY, A.S.C.
Film Editor .... ARTHUR SCHMIDT
Director of Animation .... RICHARD WILLIAMS
Production Designers .... ELLIOT SCOTT
with ROGER CAIN
Music by .... ALAN SILVESTRI
Visual Effects Supervisor .... KEN RALSTON
Mechanical Effects Supervisor .... GEORGE GIBBS
Costume Designer .... JOANNA JOHNSTON
Associate Producers .... DON HAHN
STEVE STARKEY
U.K. Casting .... PRISCILLA JOHN
U.S. Casting .... REUBEN CANNON
& ASSOCIATES

U.K. PRODUCTION

Production Manager .... PATRICIA CARR
First Assistant Director .... MICHAEL MURRAY
Second Assistant Director .... CHRIS BROCK
Production Accountant .... GEORGE MARSHALL
Production Coordinator .... CAROL REGAN
Script Supervisor .... PAMELA MANN-FRANCIS
Assistant to Mr. Marshall .... MARY T. RADFORD
Assistant to Mr. Watts .... BARBARA MARGERRISON
Assistant to Ms. Kennedy .... BARBARA HARLEY
Asst. Production Accountant .... MICHELE TANDY
Photographic Consultant .... DEREK BROWNE
Camera Operators .... RAYMOND STELLA
DAVID WORLEY
Focus Pullers .... BOBBY STILWELL
MARTIN KENZIE
Clapper Loaders .... WILF FRANCE
GRAHAM HALL
Electrical Supervisor .... MARK D. WALTHOUR
Gaffer .... DENNIS BROCK
Best Boy .... TOMMY FINCH
Video Assist Technician .... IAN KELLY
Sound Mixer .... TONY DAWE
Boom Operator .... JOHN SAMWORTH
Sound Maintenance .... SHEP DAWE
Stills .... BOB PENN
Art Director .... STEPHEN SCOTT
Set Decorator .... PETER HOWITT
Construction Manager .... ALAN BOOTH
Location Manager .... PHILIP KOHLER
Location Art Director .... KEITH PAIN
Production Buyer .... DAVID LUSBY
Storyboard Artists .... MICHAEL WHITE
SYD CAIN
Draughtsmen .... PETER RUSSELL
RICHARD HOLLAND
Decor & Lettering Artist .... ANTHONY CAIN
Modeler .... VALERIE CHARLTON
Art Department Assistant .... DENISE BALL
Make-up .... PETER ROBB-KING
Make-up Prosthetics .... JANE ROYLE
Hairdresser .... COLIN JAMISON
Wardrobe Supervisor .... RON BECK
Wardrobe Mistress .... JANET TEBROOKE
Senior Special Effects .... PETER BIGGS
BRIAN MORRISON, ROGER NICHOLS
DAVID WATSON, BRIAN LINCE
TONY DUNSTERVILLE, BRIAN WARNER
Special Effects Technicians .... TERRY COX
MICHAEL DAWSON, PAUL KNOWLES
ALAN POOLE, STUART LORRAINE
Special Effects Wireman .... BOB WIESINGER
Chief Puppeteer .... DAVID ALAN BARCLAY
Puppeteers .... MIKE BARCLAY
JAMES BARTON, MICHAEL BAYLISS
DAVID BULBECK, MARCUS CLARKE
SUE DACRE, GEOFF FELIX
CHRISTOPHER LEITH, TOBY PHILPOTT
MIKE QUINN, WILLIAM TODD-JONES
IAN TREGONNING, PATTI WEBB
MAK WILSON, DON AUSTEN
Associate Editors .... PETER LONSDALE
COLIN WILSON
Assistant Editors .... CARIN-ANNE STROHMAIER
ANDREW MacRITCHIE, LYNNE BAILEY SMITH
Apprentice Editors .... DAVID MARVITT
STEPHEN BANKS
Mime Coach .... PAUL SPRINGER
Choreography .... QUINNY SACKS
DAVID TOGURI
Property Master .... BARRY WILKINSON
Props .... JOSEPH DIPPLE, BERNARD HEARN
SIMON WILKINSON, PETER WILLIAMS
Supervising Drape .... TONY SZUCH
Asst. Construction Manager .... GORDON ROUTLEDGE
Supervising Carpenter .... FRANK HENRY
Charge Hand Carpenter .... FRED MYATT
Standby Carpenter .... PETER MANN
Supervising Plasterer .... KEN CLARKE
Standby Plasterer .... JOHN WILLIS
Supervising Painter .... ERIC SHIRTCLIFFE
Standby Painter .... DAVE WESCOTT
Scenic Artist .... TED MICHELL
Supervising Rigger .... PAUL MITCHELL
Standby Rigger .... THOMAS LOWEN
Supervising Stagehand .... JOHN TREGEAR
Standby Stagehand .... PETER WELLS
Construction Storeman .... SIDNEY WILSON
Publicity .... GORDON ARNELL
Physio .... DAVID ALLAN
Casting Secretary .... BARBARA HUDSON
Mr. Hoskins Stand-in .... SAMMY PASHA
3rd Assistant Director .... PETER HESLOP
Production Runners .... ADAM SOMNER
JANE TOMBLIN

U.K. Second Unit

Directors .... IAN SHARP
& FRANK MARSHALL
1st Assistant Director .... GARETH TANDY
2nd Assistant Director .... NICK HECKSTALL-SMITH
3rd Assistant Director .... JOHN WITHERS
Additional Photography .... PAUL BEESON, B.S.C.
Camera Operator .... WALLY BYATT
Focus Puller .... KEITH BLAKE
Clapper Loader .... BOB BRIDGES
Grip .... JIM KANE
Script Supervisor .... CERI EVANS-COOPER
Chief Make-up Artist .... LOIS BURWELL
Chief Hairdresser .... JANET JAMISON
Video Assist Technician .... CHRIS KENNY
Special Effects Technician .... DAVID HARRIS
Standby Carpenter .... ROBERT EAMES
Standby Plasterer .... LOUIS ALLEY
Standby Painter .... ADRIAN LOVERING
Standby Rigger .... GEORGE ORR
Standby Stagehand .... ANTHONY DRIVER

Animation

Supervising Animators .... ANDREAS DEJA
RUSSELL HALL, PHIL NIBBELINK
SIMON WELLS

定価 400円

昭和 63 年 11 月 25 日印刷
昭和 63 年 11 月 26 日発行

発行所 東京都千代田区有楽町1—2—1 東宝出版事業室
発行者 東京都千代田区有楽町1—2—1 大橋雄吉
© 発行権者 タッチストーン・ピクチャーズ
アンブリン・エンターティンメント・インク
編集 東京都千代田区有楽町1—6—1 ㈱スタジオ・ジャンプ
印刷所 東京都港区芝2—1—28 成旺印刷株式会社



TOUCHSTONE PICTURES and STEVEN SPIELBERG present

who framed ROGER RABBIT™

A ROBERT ZEMECKIS FILM

TOUCHSTONE PICTURES and STEVEN SPIELBERG present A ROBERT ZEMECKIS FILM BOB HOSKINS CHRISTOPHER LLOYD "WHO FRAMED ROGER RABBIT" and JOANNA CASSIDY Produced in association with SILVER SCREEN PARTNERS III Music by ALAN SILVESTRI Executive Producers STEVEN SPIELBERG KATHLEEN KENNEDY Based on the book "Who Censored ROGER RABBIT?" by GARY K. WOLF Screenplay by JEFFREY PRICE & PETER SEAMAN Produced by ROBERT WATTS and FRANK MARSHALL Directed by ROBERT ZEMECKIS

AMBLIN ENTERTAINMENT

DOLBY STEREO ® IN SELECTED THEATRES

TOUCHSTONE PICTURES

東宝